

## 学校法人金城学院 金城学院幼稚園「優秀園実践提案研究会」開催レポート

2020年2月1日（土）、2018年度「ソニー幼児教育支援プログラム」優秀園の学校法人金城学院 金城学院幼稚園主催による、「優秀園実践提案研究会」を開催しました。講師の若月 芳浩氏（玉川大学 教授）によるご講演、園庭ワークなど、充実した研究会となりました。私立や公立の幼稚園・保育所・認定こども園、小学校、養成校の学生、教員など、保育や学校教育関係者だけではなく保護者や都市計画設計をされている建築関係者を含め約100名の参加がありました。

以下に金城学院幼稚園による開催レポートを掲載します。

### 研究会概要

1. 日時：2020年2月1日（土） 9：00～16：30
2. 会場：金城学院幼稚園
3. 主題：多様な関わりの中で育ちあう『科学する心』  
～探究心を刺激する「可塑性のある園庭」とその育ちを支える「園庭ワーク」～
4. プログラム
  1. 公開園庭ワーク・会食 9：00～12：35
  2. 開会式・実践発表 12：45～13：30
  3. 協議会（1） 13：30～14：30
  4. 講演 14：45～16：15
  5. 閉会式 16：15～16：30

### 公開園庭ワーク

作業内容を聞き、各々取り組んでみたい所へ移動、その場で詳細を担当保育者から聞いてワークが始まりました。途中での移動も可能でした。また休憩は各自のペースで取っていただきました。

#### <ワーク内容>

- 山の修復、白砂整備



- 側溝掃除



- 園内畑の修理



- シート屋根の張り直し



・ ロープワーク



・ 豚汁作り



その他、エントランスに続く道を整備。保護者の方々が、園芸作業を中心に考えてくださいました。

\*初めて園庭ワークを経験する参加者は、戸惑っていたように思います。しかし作業を進めるうちに、互いに打ち解け、質問したり答えたりする光景があちらこちらで見られました。また作業を通して、同じ目標に向かい思いを一つにするという、子どもたちが園生活で、または遊びの中で通常行っていることを擬似体験しているように感じました。更に園庭整備をすることで、自園に通っている子どもたちにどのような環境が望ましいか思いを馳せている様子が伺えました。

\*在園・卒園児親子は、いつもと違う状況にも戸惑うことなく、ワークを楽しんでいたように思います。参加者との交流も其処ここで見られ、子どもたちにとって、多様な関わりの中で育つ機会を与えられたと思います。

<アンケートから>

- ◆保育者・保護者・子どもたちが皆一緒に園庭を整えていくことが、こんなに楽しくできることなのだと分かりました。
- ◆子ども・保護者・職員と共に日々使用する園庭を整備することで愛着が湧き、大切に使う心、人と人との繋がり！感動しました。それぞれの個性も活かされ、取り組みの意義を感じました。
- ◆実践を通して、体感的に理解できることがあった。帰って実践したいです。
- ◆卒園児から在園児までが集い、繋がり、創り出す園庭ワークは多様な関わりの中で、子ども達が生きていく力を育んだり、大人同士も繋がり、協働することの喜びを感じ、誰もが安心して、互いに認め合い、支え合う関係を育んでいくのだと感じました。
- ◆何より、やらされているのではなく、皆楽しそうにしていたので“主体性”でどのようなことなのか改めて考え、大切なことを教えてもらいました。
- ◆保護者の方が、園庭整備のやり方を伝えてくださったり、子どもがこの場所でこんなふう遊ぶということも教えてくださり、子どもが育つ環境の意味も感じているからこそ語れるのだと思いました。

無断転載を禁ず。引用する場合は下記を必ず明記願います。

「ソニー幼児教育支援プログラム 金城学院幼稚園 優秀園実践提案研究会 (C) 公益財団法人 ソニー教育財団 <https://www.sony-ef.or.jp/>」

## 実践発表

### <金城学院大学 日比野直子氏>

幼稚園が開園当初から探究し続けている「子どもにとってより良い保育とは何か」という定まった答えのない問いから、保育を振り返ると同時に受け継がれてきたことに触れて話されました。後に園庭作り・園庭ワークに繋がる「子どもたちにとってより良い園庭を造ろう」プロジェクトについて話される中では、子ども・保育者・保護者が繋がり合う豊かさの上に成り立つプロジェクトであったことや工事して完成ではなく、常に使い手により手を加えていける可変性のある『未完成の完成』を目指していた当時を振り返っての話もされました。



### <大久手計画工房 大井幸次氏>

建築家として携わった園庭勉強会当時から現在に至るまでを振り返って保育者とは違う視点で、園庭をどう見てきたか、自分たちにできることは何かを考えてきたことなど、作り手側の思いを初めに話されました。その中で、使い手である保育者・子ども達の思いや考え、使いやすさを聞くことに重点を置いていたこと等があげられていました。



後半は他園の実践例からも、素材の特徴やその活かし方、入手に至るまで、細かく教えて頂きました。

### <金城学院幼稚園教諭 白井安希>

子どもたちの遊びに合わせて変化する園庭の姿を、実際にどのようにして遊んでいるのか、四季折々の遊びの様子から伝えると共に、そこに保護者がどう関わっているのかも報告しました。園庭ワークに関しては、参加できなかった人たちとも活動を共有するためにドキュメンテーションなどを使って報告していることも話しました。子ども・保護者が園庭、そして幼稚園に愛着がわくことや遊びに共感し、科学する心が子どもも大人も育まれるという論文のテーマ『多様な関わりの中で育ちあう科学する心』について理解を深める内容となりました。



- \* 園庭の成り立ちを知ることで、この園庭が創造する喜びを求める子どもたち・大人たちの協働によって、造られてきていると実感しました。また、そこに集う人々の豊かな繋がりの中で育つ子どもたちの存在は、私たちが求めている【多様な関わりの中で育つ】そのものだと感じました。
- 園庭ワーク・実践発表を通して、保育者自身の主体性や保育者集団の協働性も問われていると教えられました。その上で、未来を担っていく子どもたちに何ができるのか、どう援助していくべきかを、その後のグループ協議で話し合えたと思います。

### <協議内容から抜粋>

- ◆“大人のやってみたい”が、“子どもの意欲を育む”を改めて実感。
- ◆子どもの今の姿と保育者の思いを職員同士で共有し、子どもの育ちを職員全体で考えていく姿勢を大事にしたい。
- ◆大人も大きな環境の一部であると自覚して、保育を振り返ると大人の画一的な考えが見えてくる。また様々な場面で駆け引きもある。



- ◆人と人、自然との関わりを通し大人になった時の土台・経験・根底が変わってくると思う。
- ◆多様な関わりの中で育つ子どもたちは、多様にもものを見る目、心、関係を築いていく力が育まれるのだと思いました。
- ◆多様な視点を一人ひとりが持ち、集団として繋がっていく事が大切だと思います。



## 記念講演

若月芳浩氏／玉川大学 教授



初めに子ども達が日々の遊びの中で育てている力は何か、多様性の中で生きることの意味と併せて話してくださいました。

「意欲や協調性、自制心、思いやり、粘り強さ、忍耐力、他者理解などを先に教えたがる日本の教育傾向がある。しかしこれらは経験から育ていけば自然と育っていくもの。その経験の土台は探究心からの遊びであり、多様な人と日々の生活を重ねることで大切に育てられていく他者理解である。多様であり、未知である探究心を育むためには実現可能な環境が重要な鍵である。また遊びを大切にすることから創造する力、生み出す力、考える力、切磋琢磨する力、人と繋がる力、自己充実させる力、仲間と共に考える力、人を尊重する力、多様性を受け入れる力、表現する力を実現する事ができる。」

これらの話を受けた上で、迷う部分も含めて、大人・保育者の役割は個々の持つ力を引き出すことであると話してくださいました。

後半は、遊びを中心に据えた保育の大切さ、子ども達の姿に寄り添うことで一人ひとりの主体性を引き出すこと、その為に環境が重要なことを教えて頂きました。また無限の可能性を持った園庭作りを目指している意味、それを問い続けてきたことなど当園の取り組みの大切さを再確認してくださいました。

終わりに、一つの形態の園庭に固定してしまう考えは持っていないか、環境が遊ばせてくれることで保育を見失ってはいないかと問題提起もされました。変化できないものを変化可能なものへ、園庭のあり方と保育のあり方をリンクさせて保育者が、主体的に考える事が保育の質的向上には欠かせない、その質は一般論ではなく、園独自の事、子どもの視点に立った保育の方向性・子どもも大人も“やりたい”が実現できる保育を目指して、園として可能なことを探ってくださいと力強いエールをいただきました。



## 実践提案研究会を終えて

「園庭を掘っていい」ことが衝撃的だった参加者もおられました。それぞれの経験から育まれてきた考えや一人ひとりの熱い思いを協議を通して聞くことができました。またアンケートには、若月先生の講演を聞き、園を変えていくことは難しいけれど、子どもも保育者も主体的に変わっていくことが大切と後押しされた喜びも書かれていました。保育に携わる者同士、抱えている悩みを前に課題を見据える機会になったと思

います。

今回の研究会には、保育や学校教育関係者に加え、建築関係の方も参加されました。その方のアンケートには、守りばかりに偏りがちな保育が改まっていくことを期待できると書かれていました。また学生の方は学び続けることの大切さ、保育には答えがなく、自分たちで話し合いをしながら見つけていく必要があると学んだことを書いてくださいました。子ども達を支える繋がりがまた広がったと嬉しい期待を得て終えることのできた研究会となりました。